

月刊

立川と語ろう 立川に生きよう

えくてびあん

〈EKUTEBIAN VOL.17 JULY 1999〉

7

今月号をもちまして

えくてびあん

を改号、
来月15周年記念号を期し

えくてびあん

として誌面刷新、
立川に新風を送り続けます。
引き続き
ご愛読ください。



丸太ん棒の筆立て

シンプルを極めた「男のクラフト」

丸太を切って穴を開ける。それだけ、である。ざっくりとシンプルに、余計な手を加えず自然のままを生かすこと。アウトドア精神を体現したかのようなこの筆立ては、作る過程においても、その風貌においても、まさに男のクラフトと呼んでしまいたくなる。「ドリルで穴を開ける時は、木をしっかりと固定しましょう。特に断面が斜めの場合は注意すること。ドリルの回転に木が取られやすくなり、怪我のもとになります」(石田さん)。完成後、表面を火であぶって質感を出すのもいい。



今月の先生

石田 汎さん(羽衣町)



1

材料はどんな木を使ってもOK。今回は、比較的木肌がなめらかなエゴノキを使った。



2

切り出し。断面を平らにするか斜めにするかは自由だが、慣れない人は平らに切る方が後の工程が楽。



3

切った断面にカンナをかけ、荒く整えておく。穴が開けやすいだけでなく、小さな怪我也防げる。



4

出来上がりの高さを決めて切り出し。まっすぐに切らないと、立てた時にグラついてしまうので注意。



5

電動ドリルで穴開け。木が回転にとられないよう両足でしっかり挟み、垂直にドリルを入れる。



6

カンナや紙やすりで断面を整えれば完成。表面を火であぶって、木目の質感を出すのも楽しい。



されど竹とんぼ

5月23日／昭和記念公園「第1回 関東竹とんぼ競技大会」

主催：立川市レクリエーション協会

主管：立川市クラフト同好会

共催：国際竹とんぼ協会 他

子供の遊びと侮ってはいけない。今や竹とんぼは、昔懐かしい玩具の世界を離れ、大のオトコが真剣に戦うスポーツとなってしまった。

五月晴れの昭和記念公園・みんなの原っぱに集結した全国の猛者たち。なんと北は青森、南は熊本から駆けつけた人もいる。それぞれが腕にヨリをかけ、調整に調整を重ねて拵えた“愛機”を手に、その飛行成績を競い合った。

競技は距離・滞空・高度の3つの種目で競われる。ようするにより遠く、より長く、より高く飛ばした人の勝ちだ。愛機の滑空状態に一喜一憂する選手たち。次々と大空に舞い上がる竹とんぼの姿を眺めていると、そのハマる気持ち、わかる、わかる。



めざせ、新記録!

「……よし!」。静かな気合いとともに全力で掌をすりあわせ、愛機を大空に飛び立たせる。風向きを読み、呼吸を整え、一瞬の勝負だ。表情はみな真剣そのもの。



国際竹とんぼ協会会長・石田俊治さんの挨拶で、いよいよ競技のスタート。

最高齢の出場者、貴和夫さんは78歳。なんと距離部門で2位に輝いた。さすが年輪です。

「いやあ、こりゃ上がったなあ」。みんな上を見過ぎて、首が痛くなりました。



出場者の紅一点は本誌から飛び入り参加した新人記者新井。成績は……聞かんでください。

手作りの計測器で高度を測る。角度と距離を計れば、数学の得意な人なら分かるでしょ?

滞空時間の郵便番は宮城からやってきた高橋達郎さん。竹とんぼ界ではお馴染みの顔。

私の愛機を見てください。

10年以上ものベテラン選手になると、機技によってトンボを使い分けるだけでなく、機体のデザインにもこだわりが見られる。こうなるともう、アートの世界ですな。



たみ子さんのうた

最終回

詩・清水たみ子

木の^き下^{した}

木の下を^{よお}通^{とお}っていて

なんとなくふりかえる。

いままでいた^{かぜ}風が

ふと

いない。

どこかで、だれか

やさしい目^めがわたしを^み見^みている。

青葉^{あおば}のなかに^かかくれた

風^{かぜ}と小鳥^{こどり}？



画・裨答院慶昭